

第97回 日文研フォーラム



近世商人の世界

— 三井高房『町人考見録』を中心に —

The World of Tokugawa Merchants:
Mitsui Takafusa “Some Observations on Merchants”



ヤン・シコラ

Jan Sýkora

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

近世商人の世界

— 三井高房『町人考見録』を中心に —

The World of Tokugawa Merchants:
Mitsui Takafusa "Some Observations on Merchants"

● 発表者 ●

ヤン・シコラ
Jan Sýkora

チェコ共和国・カレル大学助教授
Assistant Professor, Charles University, Czech Republic
国際日本文化研究センター客員助教授
Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



1997年6月10日(火)

発表者紹介

ヤン・シコラ

Jan Sýkora

チェコ共和国・カレル大学 助教授

Assistant Professor, Charles University, Czech Republic

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

- 1961年 チェコ・イフラバ市生まれ
1984年 プラハ経済大学大学院国際経済学研究科修士課程卒業
1987年 同大学助教授
1992年 チェコスロバキア科学アカデミー経済研究所大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
1992年 カレル大学助教授（日本社会、日本思想史専攻）
1994年 佐賀大学大学院経済学研究科修士課程卒業
1995年 カレル大学哲学部日本学科主任
1997年 国際日本文化研究センター客員助教授

主な著書：

Specific Factors of Economic Growth of Japan, Prague School of Economics, Prague 1984 (in Czech)

Traditional Moral Values and Their Role in the Modern Japanese Society, Czechoslovak Academy of Science, Prague 1989 (in Czech)

正司考祺の経済論と幕末の佐賀藩—『儉法富強録』を中心として—、佐賀大学、1994年

徳川時代後期における経済思想の考察—正司考祺の経世論を中心に—、(出版中)

主な翻訳：

Vanek, Jaroslav, *Crises and Reform: East and West: Essays in Social Economy*, IVV Mze, Prague 1990

Laski, Kazimierz, *Concepts of Transition from Command Economies to Market Economies*, Politicka ekonomie, 1991, No. 1

Okamatsu, Yoshihisa, *Rozsevani* (種を播く), with Zdenka Svarcova, Prague 1996

一、問題の提起

ただ今ご紹介を預かりましたヤン・シコラでございます。本日、皆様に、近世商人、その代表的な人物とも言える三井高房の著作について発表させていただくことは、大変光栄に存じます。

近世商人の世界―三井高房『町人考見録』を中心に―という題名ですが、まずこのテーマに関して一言説明させていただきたいと思えます。このような問題を研究テーマとして取り上げた理由は、一般的に言えば、二つあります。その一つは、個人的、もしくは主観的な理由でしょう。私は、チェコの首都、プラハに住んでいます。ご承知の通りに、去年五月に、プラハ市と京都市は姉妹都市になりました。その結果、京都の歴史や文化などに非常な興味を持っているプラハの市民はいち早く増えています。したがって、近世経済思想史を専攻している私自身は、京都の歴史に密接な関係がある『町人考見録』をチェコ語に訳し、近世初期における上方商人の生活、文化、経済的な活躍などを一般のチェコ人に紹介しあげようというのは、当然ではないかと思えます。

もう一つの理由がございますが、これは、方法論、つまりこれまで近世商人を

めぐる研究の方法と関連させる理由とも言えます。江戸時代の商人については、様々な方法で研究が進められてきました。例えば、浮世草子や浄瑠璃の脚本、黄表紙や滑稽本などの、いわゆる文学作品から考察されたもの、あるいは歌舞伎などの舞台芸術から論じたもの、また商家の家訓や店則などを利用して日本の经营理念を追求したもの、そして石門心学と関連させて類推したものなどの研究でしょう。その結果、江戸時代の商人の世界、とりわけ商人の生活・文化・思想などは、しだいに明らかになってきたが、しかし、先の方法論には、それぞれそれなりの限界があつて、まだまだ不十分だと思います。

すなわち、文学作品を利用する方法の場合には、著作に記された商人の生活・意識・思想などがいつ、どこの、どういう階級の商人のものか分かりにくく、さらには、虚構の許される文学作品なので、歴史的な事実かどうか判然としない場合が多いでしょう。また著者は、商人以外のものであつたりして、要するに、こうした文学作品は、商人自身の有様や思想より、むしろ商人に対する非商人の態度を表すものだといった方が正しいと思われまふ！

さらに、浄瑠璃や歌舞伎などの舞台芸術から論じられたものには、脚本作者の解釈を実際の商人の思想と思ひ込む心配があります。

また、商家の家訓や店則を利用する場合には、その内容が当為であるところから、やはり実態とは考えられず、特に商家経営主側の奉公人に対する願望を、奉公人自身の意識・思想と取り違える危険性もあります。

そして、心学の盛行の中で論じられる場合には、石田梅岩を初めとする町学者の思想は詳しいが、心学を熱心に聴いた一般商人自身の思想は少しも明らかではないと思います。

こうした研究方法に共通する限界は、都市生活者としての商人が抱いた思想を歴史的な事実として確定しにくいという点にあります。したがって、この限界を克服するためには、残された史料を批判的に分析して、その史料の上で史実としての商人思想を再発掘する必要があると思います。実在した商人の思想を抽出することが出来る史料は、比較的に多いですが、しかしこうした史料は、とりわけ江戸時代後期のもので、中期にさかのぼると、恰好な史料が次第に少なくなり、結局初期の史料が極めて少ない。その点から見れば、今日取り上げた『町人考見録』は確かにその貴重な史料の一例ではないかと思えます。

これまでの『町人考見録』の研究の足跡を振り返って見ると、一般的には、宮本又次氏の『近世町人意識の研究』²や『大阪町人論』³、さらに作道洋太郎氏の

『江戸期商人の革新的行動』⁴などの諸研究はまず頭に浮かんできません。こうした研究には、『町人考見録』が、社会学もしくは経営学の観点からとらえられてきたといってもよいでしょう。

ところが、元禄期前後の新旧商人の交代の状況を実に魅力的に描いているこの著作を、新商人イデオロギー形成の初段階を代表する作品として取り上げた研究は、知っている限り、極めて少ないと思います⁵。したがって、今日は、『町人考見録』の由来を発掘して、その内容を分析しながら、当時の商人世界の思想的な背景について、話を進めたいと思います。

二、『町人考見録』の由来・成り立ち

これはかなり有名な話ですが、一六七三（延宝元）年八月、三井総本家の祖先と言われる、当時五二才の三井高利^{たかとし}は、江戸本町一丁目「越後屋」という呉服店を開きました。間口九尺（約二・七メートル）の借店で、使用人は一〇人足らず、かなり小規模な店でした。資本も少なく、武家屋敷のお得意などが一人もいない状態から出発した越後屋は、多数の老舗が立ち並んでいる本町通りの呉服屋の中で

一頭地を抜くように、伝統的な商法を改めて、逸脱的な商法を採用する必要がありました。勿論、こうした新しい商法には、大きなリスクがありました。へたをすれば、倒産ということにもなるかも知れない。だが、最初に飛躍的な利益を望めない高利は、諸国商人売りや店前売たなまきうりという独特的な商法を採用しました。これは、当時の一流の呉服店のルーチンの商法（つまり、まず得意先を廻ってその注文を聞き、後で好みの品物を持って来る見世物商い、あるいは商品を得意先に持参して売る屋敷売りによる掛け売り）と全く違った新しい戦略でした。

作道洋太郎氏の説明によると、高利が採用した商法は、当時の新町人層の需要に対して、すぐれて適切的な要素を含んでいたから、まさに時流の波に乗るものでした。しかし、利益を薄くして品物を多く売り、全体としての利益を上げるといふ、今日では常識的な商法が、ルーチンの同業者たちの大きな反発の起因となりました。結局、越後屋には、「仲間はずれの者」というラベリングがなされて、このラベルは、江戸町人の脳裡に深く刻み込まれていました⁷。

逸脱者に対するラベリングによって、逸脱者を追放し、既得権益を守ろうとするのは、「家」没落の恐怖感を持っていた同業者たちの本能的な自己防衛の方法でした。中田易直氏の研究によると、本町通りの大呉服店一七軒は一七三五（享保

一〇）年には約半数の店が現実に没落しました。勿論、高利にもそういう恐怖感がありました。結局高利の死後に作られた『町人考見録』は、「家」没落の恐怖感に基づいて書かれていったと言っても、決して過言ではないと思います。

さて、この『町人考見録』の成り立ちを具体的に見てみましょう。その著者は三井高房という人物だったと思われず。越後屋の開祖である三井高利の長男高平は、三井北家の初代となり、高平と続いた高房は北家の二代目の主でした。彼が高平の長男として一六八四（貞享元）年正月に京都で生まれました。幼名は元之助、一七〇八（宝永五）年に三郎助と改め、一七一六（享保元）年八月三三才の時、父の八郎右衛門を襲名して、家を継ぎました。一七三四（享保一九）年五一才で隠居して、晩年は仏法を信仰し、髪を剃って宗清と改め、一七四八（寛延元）年六五才で没してしました。

ところが、この高房は『町人考見録』の名だけの著者で、実は編者だったという方が正しいと思われず。『町人考見録』の跋文の末尾に、その由来が、次のように記されています。

此書は中西宗助、よりく予語而云、先祖親々の功業によつて、同名一致に家業をつとめ、先は時節を得、商に不足なしといへども、町人の盛衰は其主の

守りにあり。よつて昔よりの町人の家を失ふ趣を、親に尋てしるし置き、家門の輩にも見せ度旨をすゝむ。故に此事を親に告つひ、時に老父七十年来、見および聞き伝ふる処を書記して、予是をあたふ。しばく序跋を加へ、文義をかざらずして、是を留める者也。

つまり、高房は、中西宗助のすすめによつて、父高平に昔からの町人たちがどのようにして没落していったかを尋ね、序文と跋文だけを加えて、その記録を『町人考見録』と題して遺しました。高房自身によると、実際その発端となつたのは、中西宗助という人物でしたが、彼はほとんど知られていない人だから、ここで簡単に紹介したいと思ひます。

中西宗助は当時の三井本家の大番頭で、その功績の大きさは、本店筋の氏神とも呼ばれたそうです。彼は一六七六（延宝四）年に伊勢松坂船江村に生まれまして。中西家は元々武家の出身でしたが、戦国時代の終わり頃に没落し、帰農してゐました。父勘四郎は、一時江戸に商人として店を開いたが、眼病で目が見えなくなつたから、松坂に帰つてきました。宗助は一六八七（貞享四）年に一二才で三井の松坂店の丁稚として奉公に入つて、やがて京都の本店に転じました。一六九九（元禄一二）年二四才で京都本店の支配役（支配人）となり、ついで三五才

で京都本店の元ノ役、そして一七三〇（享保一五）年五五才で大元ノ役となりました。すなわち、店員として最高位に達しました。一七三三（享保一八）年五八才で亡くなりました。彼は、三井家の創業期より守成期に移るまでの大番頭として、店の基礎を確立して、さらに大元方の常務役人として総本家の諸法度や制度の確立を実施しました。要するに、三井家の経営面に大きな足跡を残したから、三井同族と同じような取り扱いを受けて、京都の真妙堂に葬られました。

ところで、ここで指摘したいのは、次のことです。彼が、一七二二（享保七）年に三井家の根本的な家法ともいわれる『宗竺遺書』を起草したのは、一般的に認められている事実です。したがって、一七二六（享保一一）年頃に編纂された『町人考見録』も、高房の命令で中西宗助自身に作られて、献上されたものだった可能性が高いと思われます。

さて、著者あるいは編者の意図を手短に見てみましょう。これは序文と跋文に明確に示されていますが、まず挙げるべきは、家職いわば家業のことでしょう。つまり、既に述べたように、「町人の盛衰は其主の守り」ということにかかっています。序文にも書いてありますが、親苦勞し、子樂し、孫乞食する、といわれるように、初代が営々としてきずき上げた資産を孫がつぶしてしまうのは、「みな々

同じく職をわするを以て、先祖大業を空しくす¹⁰ることでした。要するに、當時、家職・家業は家産として、上層商人の保守すべきものだったと思われます。

勿論、『町人考見録』だけでなく、西鶴の『日本永代蔵』にも同じ観点が表れています。

時の間の煙、死すれば、何ぞ金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立ちがたし。しかりといへども、残して、子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに、世にある程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事、天の下に五つあり。それより外はなかりき。これにましたる宝船のあるべきや。見ぬ島の鬼の持ちし隠れ笠・かくれ蓑も、暴雨の役に立たねば、手遠きねがひを捨てて、近道にそれぞれの家職を上げむべし。福德はその身の堅固にあり。朝夕油断する事なかれ。殊更、世に仁義を本として、神仏をまつるべし。これ、和国の風俗なり^{!!}。

あるいは、

これを思ふに、銘々家職を外になして、諸芸ふかく好める事なかれ。これらも常々思ふ所の身とはなりぬ。なからず、人にすぐれて器用といはるるは、その身の怨なり。公家は敷島の道、武士は弓馬、町人は算用こまかに、針口

の違はぬやうに、手まめに当座帳付くべし¹²

ともかく、商人は家職に専念することがもつとも強く求められたのです。

又、もう一つ、商人を支えたのは、金銀だと思われれます。『町人考見録』の序文に戻ると、

それ天下の四民士農工商とわかれ、各其職分をつとめ、子孫業を継で其家をととのふ。就中町人は商売それ々にわかるといへども、先は金銀の利足にかゝるより外なし¹³。

と明確に書いてあります。幕府の御用金融を、両替屋経営の根本的な方針としていた三井家の二代目高平が、「金銀の利足」の大切さを強調したのは、当然のことでしょう。薄利多売主義で、掛け売りなしの現金売り、正札売りの新しい商法は、相互の信用を重く見る旧商人には一種破天荒なものでした。

西鶴の言葉での「只銀がかねをためる世の中」¹⁴には、「算用なしに慈悲過たるも、又おろか也」¹⁵というように、『町人考見録』の跋文に説明されています。しかし、算用一点張りということだけではなかったと思います。ここには、また仁義・人道の大切さも説かれています。¹⁶

要するに、宮本又次氏が書いたように、富有な商人に要請されたことは、結局

家法を守って、家業に精励して、相当に生活することでした。

三、『町人考見録』の分析

既に述べましたが、『町人考見録』は、三井家以外の人に読ませるためのもではなく、序文の一番最後に書いてあるように、

前者の覆るを見て、後車のいましめのため、見および聞伝ふる京都の町人、
盛衰をあらまし爰にしるす耳¹⁷

という教訓を、子孫に、はっきり示すために作られたものです。したがって、三井家の番頭、手代、丁稚によって写されて、三井家の内に参考書として早めに普及してきました。原本は残されていないですが、しかし転写本が極めて多いです。現在、その一つ一つを調査することは、不可能だと思えますが、今日は、三井文庫に所蔵されている代表的な写本を紹介したいと思います。

同文庫に所蔵されている二二本の中でこの写本（登録番号 特三函／一、三三）は最も達筆の写本でしょう。上・中・下、合わせて三冊から成るこの写本の文章の末に、「高房」の署名、さらに朱印があります。これは高房自身が写した写本では

なく、むしろ高房から各三井家に頒布したものだろうと思われれます。勿論、国立国会図書館や早稲田大学付属図書館などにも所蔵されている写本もありますが、しかし三井文庫以外のものには、高房印がありません。

さて、実例を引用しながら、同文庫の写本を中心にして、その内容を手短かに見てみましょう。多分繰り返しになります。『町人考見録』には、当時の京都を中心にする富裕な商人家の盛衰がみごとに浮き彫りにされています。厳密に言えば、本文には京都の五〇人、跋文には江戸・大阪の五人、合わせて五五人の事例がまとめられています。この五五家の資産を没落させる様々な原因がいくつかありますが、時間不足で具体的な分析を略して、代表的な例だけを見せていただきたいと思えます。

様々な倒産の原因の中には、まず取り上げるべきは、大名貸しでしょう。当時諸大名は、参勤交代に伴う交通費・滞在費、さらにそれぞれの藩に起こした殖産事業などで相当な金銀を必要としたから、京都の商人・両替屋に貸付け（仕送り）を求めたのです。下記の表は、『町人考見録』に、実例として挙げられた商人と貸付け先の名の一覧です。

<p>潰された町人</p>	<p>石河 自安 袋屋 常皓・弟与左衛門 高屋 清六 二村 寿安 平野 祐見 糸屋 十右衛門 両替 善六 両替屋 善四郎 阿形 宗珍 小牧 惣左衛門 三宅 五郎兵衛 両替 善五郎 辻 次郎左衛門 八文字屋 宗貞 久住 権兵衛</p>
<p>貸先大名</p>	<p>細川家 松平家 南部家 細川家 尾州、紀州、徳川家 細川家 森家 毛利家 伊達家 諸大名方 立花家 諸大名方 前田、細川、浅野家 鍋島家 諸大名方</p>

和久屋 九郎右衛門	浅野家
三井 三郎左	紀州徳川家、細川家
浦井 七郎兵衛	酒井家
千切屋 惣左衛門	井伊家
三木 権太夫	黒田家
玉屋 忠兵衛	松平家
上澄屋 次兵衛	諸大名方
百足屋 久左衛門	同
花房 一党	同
田辺屋 平三郎	同
藤屋 市兵衛	同
薩摩屋 新兵衛	同
家原 自元	細川家
片木 勘兵衛	小笠原家
吉野屋 惣左衛門	細川家、黒田、立花家

出所：三井高陽『町人思想と町人考見録』、ラジオ新書、一四二一年、二六一―二七頁。

『町人考見録』にまとめられた五五人の中には、三〇人は大名貸しによる破壊を受けたものです。これらは、諸大名の横暴性を示すものですが、しかし他方、商人の利益追求の意欲と彼らのもろさとを語るものでしょう。一七世紀半ばぐらいまでは、この大名貸しがもっとも儲け口でした。『町人考見録』には次のような説明が書いてあります。

それ大名がしの商売は博奕のごとくにて、始少のうちに損を見切らず、それが種に成り元を動かさんとかゝり、(中略)然からば此借引は止み可申ことなり
に、博奕をうつもの、始より負んとてかゝり候もの、一人もこれなく候。(中略)扱大名貸の金銀やくそくのごとく、よく取引在之候へば何か此上もなき手回し、人数はかゝり不申、帳面一冊、天秤一艇にて埒明、正真の寝て居て金をもふくるといふは此事にて候。¹⁸

ところが、この、寝ながらお金儲けのできる魅力は、焦げ付きによる資産つぶれの危険への警戒心を鈍らせたでしょう。

武士は計略をめぐらし、勝事を専とす。是軍務の職也。町人はよきほどを見合、金儲して残銀を見切て、徳分を得んとおもへども、武士は四民の頭、知識兼備の役人、中々其手は見通し、却てうらをくわせ、先を取て彼かたより

よきほど取込、断を申出す。町人の竹鑓を以て武士の真剣に向がごとく、相手に不及。それ大名の仕送り、始より理屈の詰ざる事に、誰か大切の金銀を出し可申や。¹⁹

つまり、町人を上回る武士の知謀（いわば真剣）の前に竹槍がいかにもろいかを語っています。それは士農工商といった、社会的な身分関係を示すものでしょう。従って、三井家では、家法として理屈に合わない大名貸しは原則的に禁止していたようです。

兵書にも、敵を知己を知を以て名将といふ。武士を町人としてはからん事、是敵をしらざる也。²⁰

要するに、大名貸しをしないのが一番だということですが、貸した場合には、十分に注意する必要があります。このような考え方は、三井家の経営戦略の本柱に成ったといっても、決して過言ではないと思います。

さて、大名貸し以外にも、没落のきっかけはいくつかありました。その一つは、金山を採掘したり、山を切り開いたりする大工事でした。このような投機事業については、米沢屋久左衛門の項目に見えている河井又左衛門という人物はちょうどいい例でしょう。彼は、近江の琵琶湖からの水を越前の敦賀の港へ落とす七里

半という運河を掘さくして、船を通す計画に着手しました。しかしいくらかお金を使っても、その計画を完成できず、結局家を潰してしまったそうです。²¹

また、『町人考見録』によく挙げられている、豪商家の没落のもう一つの原因は、奢り・奢侈という悪風です。

それ奢りに二つ有。身の奢、心の奢也。多は心の奢生ずる故、身に美麗を好む。(中略)奢は大人は国を失ひ、小人は身を失ふ。祖先はかんなんの功を積み、昼夜金儲に身のあぶらを出して、溜置金銀を、せめてふやし儲ること、はあらずとも、其身祖先の冥加を思ひて、よく守るべき所に、さはなくして、かゝる奢りになしはたし、終に家を失ふ事をや。²²

このような一般的な例は、次に具体化されています。絶対に許せない奢りの実例としては、まず珍しい名品の茶道具を購入すること、さらに和歌、能、歌舞伎などの遊芸を好むこと、そして仏教の信仰を過ぎて、華美な寺院を建設したり、お寺への金銀の御用達で出入りしたりすること等々の例を取り上げてもいいでしょう。

さて、この遊芸のもっとも適当な例は新屋伊兵衛だろうと思います。彼の場合には、著者が強調しているのは、自分で家業を忘れて、かえって芸能を好むより、

むしろ子供に家業の代わりに歌舞伎や能などを習わせるほうが悪いという観点です。

然るを子どもに遊芸ユウゲイをならはし申事、第一其親のあやまり也。(中略) 天笠テンダツの獅子シは百丈の峰ミネより深谷シコクへ自落ミズクラフトして、子獅子コシの猛タケキをこゝろみる。鷹タカは巖壁ガンベキに巢スを喰クイ、人来て其子を取るといへども、子鷹コカクイ大守ヤシナハルに養るゝ事を以て悦び、子を取る事をいとはず。其外の禽獸キンジウも子をつれ餌エをはむ事ををしゆ。然るに人の親として渡世ワセのみちを不教フセウ、却カヘツてあしき道に引入るゝ事、禽獸キンジウにも劣アトり申候マウ。23

要するに、このような引用には、当時の新商人の家業の永続を中心にする家訓だけではなく、それぞれの個人的な教訓も明確に表れています。

これまで取り上げた例は、すべて否定的な事例でした。しかし、『町人考見録』の中には、数が少ないですが、勿論、肯定的・積極的な商人の姿も描かれています。この代表的な人物は藤屋市兵衛でしょう。『町人考見録』によると、彼は

極キズメて商人心成ナマシもの故、段々身上よく成、一生に二千貫目の分限と成り申候。24
そう言うわけで、

此市兵衛がしまつ咄し、諸人の多しる所、猶草紙永代蔵などに是を書載ノす。25

そして、『日本永代蔵』の巻二を見てみると、西鶴は、

「借屋請状之事、室町菱屋長左衛門殿借屋に居申され候藤市と申す人、慥かに千貫目御座候」「広き世界にならびなき分限我なり」²⁶

などのように、この藤屋を「世界の借屋大将」として描いたほど高く評価しています。

したがって、終に、高房と西鶴との見方を比べてみましょう。『町人考見録』は、すでに述べたように、三井家を担っていく人たちに何を避けるべきかを教えることを第一の目的として書かれています。この点で、当時の一般町人の読者に向けて書かれた『日本永代蔵』が、商人が成功するために何が必要だかを説明しようとしていたことと無関係ではありません。つまり高房の著作は、否定的な実例に基づいていますが、これに対して西鶴の作品には、富の追求の肯定的な例証が挙げられています。しかし、両者の根本には、共通した認識があります。すなわち、不確実さと見通しの立たなさが、商人の生活における中心的な事実だということです。商人は彼らの家の存続を考えなければいけません。運命はすべて自分の手にかかっているのです。たびたび「儉約」、「算用」あるいは「賢明」、「勤勉」、「正直」などという言葉で商人の道徳を表そうとしますが、そのような言葉は、抽

象的な原理から導かれた単なる道徳的なお説教や戒めではなく、商人が代々生き延びるための、すなわち武士階級が生まれつき保証されていたものに匹敵するよ
うな断続性を獲得するための実践的な戦略だと思われます。²⁷

四、結論にかえて

最後ですが、ある意味で秘密の家訓として書かれた『町人考見録』はどれだけ
当時の一般の商人に知られていたのか、つまり新興商人イデオロギーの形成にど
のような影響を与えたのかなどを手短かに考えてみましょう。

まず、一七五七（宝暦七）年に岩垣光定によって書かれた『商人生業鏡』の第
一卷の書き出しを見てみましょう。

或人の曰、四民は士農工商に分かれ、おのゝ其職分を勤め、子孫を継で其家
をととのふ、就中商人は天下の貨財を通じ、（中略）金銀利足の外なし、しか
るに田舎の町人は、それぐ々に国の掟を憚り、其うへ目に美麗を見ざるゆへ
に、心うつる事なし、此故に数代業をつとむ、京江戸大阪の町人は、其先祖
あるひは田舎、または人の手代より次第に経て上り、商売を弘め富を子孫に

伝へんと、一代身をつめ家職に心をいれ、かんなん辛苦して、其子家を継ぐ、其子は幼少より親がよく教で、つゞまやか成事を見覚して、又其家のあまり富ざるいちに生立せしゆへ、漸々其一代は守り勤む、これも不行跡なれば不続、其孫の世に至りては、家の富る時に出生せしゆへ、金銀の大切といふ事をしらず、(中略)名ある町人二代三代にて家をつぶし、跡形なく成行事、眠前に知る所なり、(中略)百姓職人の家数代伝る事は、一日も怠る時は、忽ち衣食をうしなふゆへに、尤もより勤むるなり、只商家のみ金銀を沢山におもひ、先祖の事も思はず、手代任せにして、其身は業を勤めず、終には家を失ふ事多し、前者の覆るを見て、後車のいましめとすべし。²⁸

さて、この著作を『町人考見録』の序文と比べてみましょう。

それ天下の四民士農工商とわかれ、各其職分をつとめ、子孫業を継で其家をととのふ。就中町人は商業それぐにわかるといへども、先は金銀の利足にかゝるより外なし。然るに田舎の町人はそれぐの国主・地頭に憚り、其上めにさのみ美麗を目ざる故に、心におのづからうつる事なし。爰を以ておほく代を累て業をつとむ。京・江戸・大坂の町人は、其元祖、或は田舎又は人手代より次第に経上り、商売をひろげ、富を子孫に伝へんと、其身一代身をつめ、

家職の外に心をおかず、かんはんしんくを積で、其子家を継、其ものは親のつましきことを見覚へ、又は其家のさまで富まざるうちに生立習ふ故に漸其一代は守り勤といへども、又其孫の代に至りては、はや家の富貴より育立、物ごとのかんなん、金銀を大切と云う事をしらず。(中略) 凡京師の名ある町人、二代三代にて家をつぶし、あとかたなく成行事、眼前に知る所也。(中略) 百姓・職人等は数代家を伝ふる事、一日も怠るときは、忽食をうしなふ故に、尤よくつとむ。只商家耳後は手代まかせ、其身は代の続くにしたがひ、家業をわするゝを以て、終に家をうしなふ。前者の覆るを見て、後車のいましめのため、見および聞伝ふる京都の町人、盛衰をあらかし爰にするす耳。²⁹

前者と後者との共通点が極めて多いので、『町人考見録』の約二〇年後に書かれたこの『商人生業鏡』の著者が高房の著作をよく知るべきことは疑いがないと思えます。

また、一七九四(寛政六)年に土屋巨禎が書いた『家業相統力草』³⁰にも、『町人考見録』からの引用文が発見できます。

要するに、『町人考見録』は、西鶴の『日本永代蔵』と同様に、かなり早く普及して、一般的に知られたと考えてもよいでしょう。その点から見れば、石田梅岩

が『都鄙問答』を出版した約一五年前に書かれたこの著作は、一八世紀における新商人イデオロギーの形成過程に見落とすことの出来ない役割を果たしたというのは、決して過言ではないと思います。

ご静聴ありがとうございます。

注

- 1 布川清司『近世町人思想史研究―江戸・大坂・京都町人の場合―』、吉川弘文館、一九六一年、二六頁。
- 2 宮本又次『近世町人意識の研究』、『宮本又次著作集』第二卷、講談社、一九七一年。
- 3 宮本又次『大阪町人論』、ミネルヴァ書房、一九五九年。
- 4 作道洋太郎『江戸期商人の革新的行動―日本の経営ルーツ―』、有斐閣、一九六六年。
- 5 その一例は、三井高陽『町人思想と町人考見録』、ラジオ新書、一九四年。
- 6 作道洋太郎、前掲書、一五頁。
- 7 同右、一五七頁。
- 8 中田易直『三井高利』、吉川弘文館、一九六六年。
- 9 三井高房『町人考見録』、中村幸彦校注『日本思想史大系第五九卷 近世町人思想』、岩波書店、

- 一九五年、二三〇～二三三頁。
- 10 同右、一七頁。
- 11 井原西鶴『日本永代蔵』卷一、谷脇理史校注『日本古典文学全集第四〇卷 井原西鶴集 第三卷』、小学館、一九七三年、二〇〇～二〇三頁。
- 12 同右、三九頁。
- 13 三井高房、前掲書、一七頁。
- 14 井原西鶴、前掲書、卷二、一四頁。
- 15 三井高房、前掲書、三三頁。
- 16 宮本又次『大阪町人論』、ミネルヴァ書房、一九五九年。
- 17 三井高房、前掲書、一七頁。
- 18 同右、一八〇頁。
- 19 同右、一八三頁。
- 20 同右。
- 21 同右、一九頁。
- 22 同右、一八〇～一八三頁。
- 23 同右、一八〇～一八三頁。
- 24 同右、二〇八頁。
- 25 同右、二〇八頁。
- 26 井原西鶴、前掲書、卷二、二九頁。

- 27 Najita, Tetsuo, *Visions of Virtue in Tokugawa Japan: The Kaibokudo - Merchant Academy of Osaka*, Chicago: The University of Chicago Press, 1987, p.21.
- 28 岩垣光定『商人生業鏡』、龍本誠一編『日本經濟大典』卷一三、啓明社、一九六〇年、五四～五五頁。
- 29 三井高房、前掲書、一頁～七頁。
- 30 土屋巨楨『家業相統力草』、龍本誠一編『日本經濟大典』補卷二、明治文獻刊、一九六〇年、二五～三〇頁。

*** 発表を終えて ***

従来の歴史家の通念では、徳川時代の道徳哲学は、支配体制が身分構造をそれに基づいて規定したもので、そのなかで商人は、社会秩序の底辺に、つまり重要さの序列からいけば、士・農・工・商よりも下位に位置づけられていたと考えられています。さらに、商人はどんなに富を誇っても、その富が幕藩体制に寄生することによって得たものにすぎなかったという認識も、その通念に加えられています。ところが、近世商人は経済的な利益を追求しながら、日本文化にも見落とすことのできない跡を残したと言ってもよいでしょう。したがって、今こそ近世商人は日本の近代化にどのような役割を果たしたのかと考えて直すべきと思っています。

もともと経済学を専攻した小生は、日本語や日本学を趣味として独学的に勉強しはじめました。しかし、日本の文化に関する知識を深めれば深めるほど、経済学と日本学を何等かの形で結び付けることができないかと考えるようになりました。現在勤めているカレル大学は、まず言語学、文学、歴史等の分野を優先させる教育機関ですが、多様な研究活動を支援する日教研に研究させていただいて、大変嬉しく思っています。心からお礼を申し上げます。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラル・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 - 『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 -米国の日本美術コレクションの一例として-
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践-有島武郎の場合-
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 -旧身分文化との関連を中心として-
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 -科举制度をめぐる-
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り - 平安朝文学の特質-
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACE 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦8	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧0	7.12.19 (1995)	タチャーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Silvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前記に來日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に - 」

98	9.7.8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学－近代からの再生－」
99	9.9.9 (1997)	ポーリン ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア ウィリアム グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か－21世紀に向かって」

○は報告書既刊

発行日 1997年12月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1997 国際日本文化研究センター

■ 日時

1997年6月10日(火)

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

